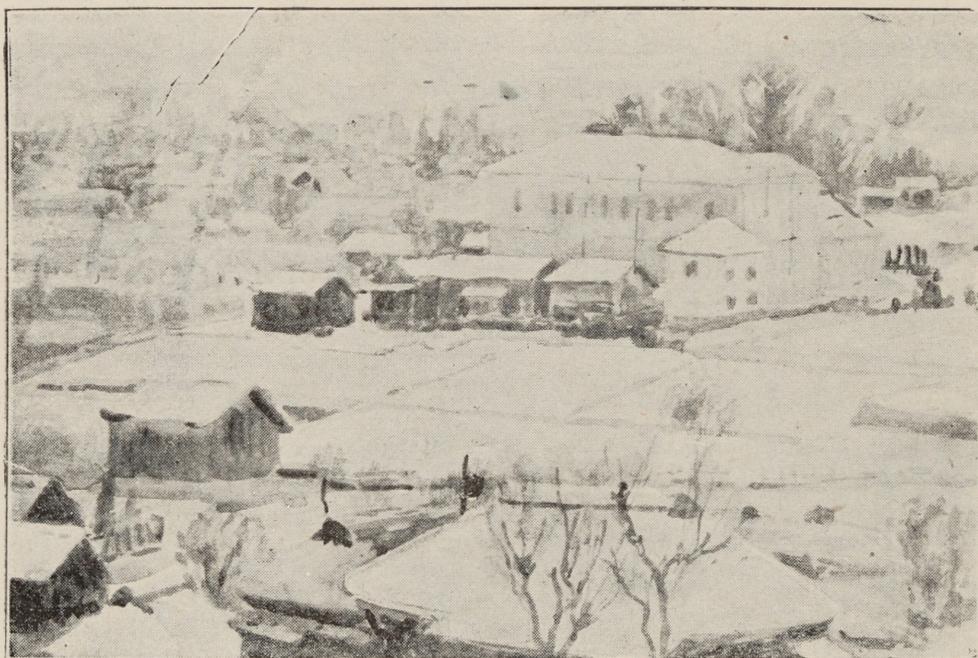


此準備とにより、「みづゑ」は一步一步に進歩發展した。大下君は實に博愛的人たりしと共に、用意周到の人であつた。

此他、日本水彩畫研究所の設立等に關し、大下君に對する余の感想は、まだ澤山あるが、要するに氏は理想の實行に向いて、着々歩を進め、着々成功した人であると思ふ、又一個人として見れば、氏は情の人にして、知の人であり、美の人にして徳の人であつたと思ふ、畢竟するに、常識の發達したる人にして、實にセントルマンのモデルであつた事は、何人も首肯する所であらふ。今や年不惑を超えて、事業の基礎漸く堅く、向後の活動大に見るべきものありしに、一朝 然として不歸の客となられた、美術界の打撃。國家の損失。余の絶望。噫。(完)

## 教師室から

服部 嘉香



雪の朝  
○  
もありませんか。今日のやうに、霧がしつとり下りてゐて、柔かな日光が泣いてゐるやうに、霧の中に浸み込んで、家屋や木立の輪廓がぼんやりしてゐるのを見ると、そぞろに大下先生の繪に表はれた心持が偲ばれます。

朝の雪  
○  
お約束の原稿が、遅くなつて済みません。三月號にも、亦間に合はない事になつてしまひました。すでに一度違約をしたのですから、今月は何うしても、早く書上げばならぬと思つてゐたのですが、思ひがけ無い用事が出来たので、とうとう、又御詫びをせねばならぬ事となりました。

筆  
○  
學校で眞野さんにお目にかゝる度に、いつも「今度は書きます」と言つたのですが、此の八日に、私どもの舊藩主の御老公が、おかくれになつたので、舊藩士は毎日のやうに、松山から上京しますし、私ども在京の人々は、それらの仕事を休んだり、仕事の時間中を都合したりして、毎日お邸へまゐつて、色んな用事をして居ります。私もお通夜をしたり、お手傳ひなどをして、宅

暖か過ぎたり、寒かつたり、ずぬぶん不順な時候ですが、お變

へ歸る時は、いつも夜の十一時。十二時で、原稿も手紙も書く事が出来ません。それに此の一週間は、電車に乗つてゐる僅かな時間の外は、全く讀書を廢してゐるやうな次第です。

十八日に芝の増上寺で御葬儀があります。私は接待掛の役割で、當日は朝の六時までに、お邸へまゐります。御埋棺を終るのは、多分夜の八時頃にもなりませうか。こんな次第で、雜誌の原稿×切時間たる月の中旬を、一向落ちつく折もなく過しましたので、とうとう「みづゑ」の間合はなかつたのです。

○  
ウイルヤム・ナイト氏の『美の哲學』と題した上下二冊の中、下巻の「繪畫論」を抄譯しようと思つてゐるのです。極く平易な、要領を得た記述で、新説といふものでもありませんが『みづゑ』の讀者諸君に、多少とも参考になれば結構です。四月號から必ず「繪畫美學」と題して連載します。

○  
赤阪の三會堂で『白樺』主催の展覽會があります。ロダンの彫刻も、實物が三個來てゐるそうですから、是非見に行きたいと思つてゐます、今日にもに行つて、感想を書いてさし上げたいのですが、時間の都合が悪いので、其れも出來かねます。

一寸お佗びと存じ、くだらぬ事を書いてしまひました。何うぞ悪しからず。(二月十六日)

## 下藤次郎氏の繪日記

故大下君は、至つて丹念な人で、あの忙がしい最中に、缺かきず日記をつけたり、紀行文を書いたりしてゐる、紀行文は歿後、遺稿として本誌に出したことがあるが、日記に至つては、繪ばかり、之れも粗末なナモ帖に、鉛筆で至極あつさり、スケッチがして、日附があるばかり、どうかすると、目を惹いた野外の植物などを、寫生した傍に、その名や、色彩を註してあることがあるが、その外は何も書いてないのが多い、ツマリ、人に見せるためでなく、自分一人の憶ひ出の種にしたのらしい、人物なども、同君には誰といふことが解つてゐて、他人が見ると解らぬ、その日記は十數冊あるが、こゝに三十九年四月の日記から、五枚ばかり切り取つて、寫眞版にして掲げて置く、もつと面白いのであるのだ、四月といふ月に重きを置いたので、こんなものが出來た。

## 非人情の記

幸雄

### 三

降りしきる雨の中を、心細そうな建さんを引張つて、無二無三に歩いた、今は菅笠の恥しさも、建さんの身體の心配も、よい加減にして、出來る丈元氣の出る様な話をしながら、歩いた。何だと問はれたら、河ですと答へ度い様な道を、幾度か倒れさ